

新しい生活文化を発信する

AIM

主な記事

- 1面 災害の救援・復興にもっと女性の参画を行ってきました「立川防災館」
2～3面 地産地消～立川野菜はおいしくて元気
4面 立川・この人
アイムインフォメーション/編集後記

3/25 NO.12

2005(平成17)年
年3回(8月・12月・3月)発行

発行/立川市女性総合センター
企画・編集/市民編集委員
(〒190-0012)立川市曙町2-36-2
☎042-528-6801 FAX042-528-6805
e-mailアドレス tc-aim5@m-net.ne.jp

災害の救援・復興に

新潟県中越大震災に学ぶ

とっも

女性の参画を



'04年、秋。山古志村(写真は新潟県提供)

中越大震災と女性

(財)新潟県女性財団理事長 大島煦美子さん

今日もまた、新潟県中越大震災の被災地に雪が降りつづいています。積雪は多いところでは3メートルを超え、自宅から離れた避難生活のために、雪下ろしもできず、雪の重みで倒壊する家屋も出てきています。被災された皆さんはその過酷な現実を受け止めながら、必死に立ち上がろうと頑張っています。

あの震度7の「新潟県中越大震災」が起きたのは……。全国の皆様から寄せ続けられている支援の動きに、同じ新潟県民として心からお礼申し上げます。ここ新潟市は震度5ほどで、震源地から離れていたため、被害はなかったのですが、震源地近くの中越地域には女性財団関係者や親戚、知人が多く、その安否確認ができるま

で2、3日は眠れない夜が続きました。

復興現場に女性の力を

復興に向けて行政職員は日夜頑張っていますが、関連担当役職に女性が皆無というところで、初期の災害発生段階で女性の視点が生かされませんでした。そのために、共同生活の中での着替えや授乳場所の確保、仮設トイレの設置のしかた、健康面のこと、また支援物資の分類方法等々、細かいことなのですが、女性にとっては大切な事柄が後手になったようです。

女性職員が防災、復興などの部署に位置付けられるよう積極的な対応が、これからは重要なことのように思います。

被災女性の心のケア

また、これからは被災した女性たちの心のケアも重要な

ことのように思われます。夫や男性たちは被災後早い段階で職場復帰し、日中の諸事はほとんど女性に課せられている状況です。家族も女性の職場復帰が遅くなるのは当然と考えています。そのため、職場との板ばさみになったり、職場縮小のターゲットはまず女性など、多くのストレスを抱え込んでいるようです。

内閣府男女共同参画局の提言をいかして

災害当時、政府の「現地対策室」に女性の視点が必要との認識から、内閣府男女共同参画局の女性担当者が、女性としてはただ一人「現地対策室」に加わり、現地で被災女性たちの聞き取り調査をしてくれました。その時の提言が生かされ、県では既存の女性相談窓口で震災関連の相談も受け付けるようになり、最近では、女性の悩みや生活相談を受けるために県の女性職員が被災地に向いたりもしており、本当に良かったと思っています。

復興に女性の参画が必要

県は被災者の自立支援や復興対策を補完し、早期復興に役立てるため、復興基金を3月1日に設置する予定です。知事から女性の参画をということで、私も理事として関わることになりました。女性の視点を生かした発言を、しっかりしていかねばと思っています。(05年2月 寄稿)

行ってきました立川防災館

アイム編集委員の体験レポート

昭和記念公園東に、立川防災館があります。パンフレットによれば、「災害の本当の姿を知り、その時の行動方法を楽しみながら学べる」というので、さっそくアイム編集委員で体験してみました。

■地の底に引きずり込まれるような震度7

Kさん

まず、館内に入ると受付でカードをもらい、係の人の案内で地震体験室へ。

最初に日ごろから家族で防災について話し合い、対策をとっている家庭とそうでない家庭では、実際に地震にあった時どう慌てぶりが違うかビデオで見てから、実際に震度7まで体験しました。



地震体験コーナー。震度7まで体験可能

震度7になると机の下にもぐっていても机自体が動いて、地の底に引きずり込まれるような感じで、これが現実であったなら……とその恐ろし(※)

中越地震発生直後、政府の支援対策に女性の視点が必要ということ現地飛び、避難所やボランティアセンターで被災女性の課題を調査しました。まず印象的だったのは、被災者女性に比べ、行政にもボランティアにも女性が非常に少なかったことです。調査の中で見えた課題は、

●男性は震災後すぐに職場に

内閣府も現地で聞き取り調査

(内閣府男女共同参画局 小宮恵理子さん談)

●健康面等の相談や要求がしづらい。具体的には女性用品が足りない。トイレが男女一緒で着替える場所もない、な

必要があります。

初めは余り話さなかった女性たちも、踏み込んで聞くと日常生活のすべてにわたって話が尽きず、聞いてもらうこ

とで癒されるところもあるようです。

は男女とも変わりません。男性が多い防災部署ですが、女性の視点が十分盛り込まれる

立川農産物直売所(幸町)運営委員会会長

嶋田 政雄さんにインタビュー

薬物が青々して、とっても新鮮そうですね

嶋田 ええ。毎日その朝に採れたものを出しています。売れ残った物はすべて引き取り、翌日まで持ち越すことはないのが新鮮ですよ。

ただし、畑で採れる旬のものを生で出しているのが、大型スーパーのような品揃えは残念ながらできません。また、この間食でおいしかったからまたと思っても、収穫時期が終わって、もうないということがあります。

嶋田 品出しは、販売所を運営する会員農家で話し合い、予定表にあわせて各農家が交

代で準備するので、結構大変です。最近、養鶏農家が会員になったので卵も並ぶようになったし、多くの品数が並ぶように、われわれも努力していきたくと思っています。

気になる価格ですが、お安いのでしょうか

嶋田 基本的には市場価格に連動して決めています。1〜2割は安いのではないのでしょうか。たとえば、気候条件が悪く、市場で野菜が高めの時でも、立川にそうした影響がなければ、いつもと同じ値段で出しています。その逆もありますが、市場価格よりあまり差が出ないようにしています。納得していただける価格だと思います。

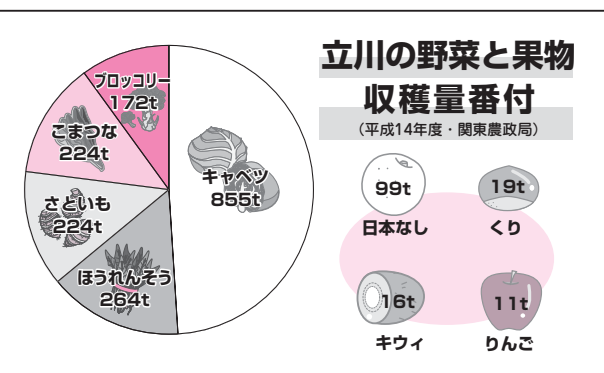
栽培方法はどうでしょうか



会話ははずんで…。毎日、朝採りの旬の地場野菜が並ぶ幸町の立川農産物直売所

おいしくて元気に立川野菜は

地産地消 CHI SAN CHI SHO



輸入牛肉の安全性が話題になるなど、「食」の安全性について関心が高まっています。農林水産省も昨年、「食の安全・安心のための政策大綱」を作り、食への信頼回復に取り組み始めました。インスタント食品やファーストフードの利便性を選んできた一方で、「安全で安心な食物を食べたい」という思いは「スローフード運動」の高まりの背景となっています。それぞれの地方で採れる作物のよさを見直し、生活に取り入れていくことから得られる豊かさ。そしてそれは、その地域の緑を守ることにもつながるということ。立川市も「地産地消」に取り組み、地域の農産物の栽培・販売に積極的です。いろいろな意味で、注目したい立川野菜を取材しました。

授業(九中)でも給食でも地場野菜が大活躍

おいしい野菜を自分たちの手で

今年で5年目を迎える「九中農園」。1年生の「総合的な学習の時間」に位置付け、年間を通して活動を行っています。農地を無償で借り受け、JA十番支部の方々の指導で、整地・堆肥・種まき・苗付け・草取り、収穫まで、農作業の一から十まで生徒たちが自主的に取り組んでいます。



やったあみんなてどうもろこしの収穫

栽培する作物は、ジャガイモ・サツマイモ・里芋・とうもろこし・枝豆・スイカ・大根・人参・ごぼう・落花生・キャベツ・葉牡丹の12種類。害虫退治や夏の草取りなど、日頃味わうことのできない苦労は、自分たちが育てている作物への愛情へと変わっていきます。

給食でも好評!

地場野菜は学校給食でも活躍しています。第一共同調理場の工藤係長によれば、最初に地場野菜を取り入れたのは自校方式で、週1回から始めたそうです。その後、農家の人と話し合いを重ね、今では毎日、朝採りの野菜を学校に直接配送して、給食に生かしているとのこと。



地震で家具が転倒した室内の展示

資源循環型社会へできることから

富永 文子さん (エコチャレンジャー)



立川市立第3小学校3年関山吉理さんの作品

という活動をエコチャレンジャーの仲間と始めました。環境問題や食の安全への関心から、みんなで都の農業試験場やごみ処理場を見学したり、堆肥化している方から

肥を作ってもらった。その堆肥で育てた地場野菜を食べるという資源循環の輪を、8人の仲間とつくりあげました。地場で採れる旬の野菜のおいしさは格別。でも、旬を食

旬の食材で豊かな食生活を

数谷英雄さん(スローフードをすすめる会)

日本はもとより、旬の食材を生かし、食生活を豊かに営む文化がありました。しかし経済優先、効率重視の中で、私たちの生活が忙しくなるにつれて、加工食品が多用され、次第に手間のかか

地産地消が基本

画一的な味ではなく、旬のものや質のよい食材を使い、手間ひまかけて料理し、楽しんで食べようというスローフード運動は、いわば日本の心の健康や子どもたちの未来が案じられているのは存じのとおりです。そうした中、1980年代

地場野菜の販売所は、たくさんあります

嶋田 立川は東京の中でも有数の農業地域です。でも、今までは市場に作物を出す農家が多く、地場の野菜を地元ではなかなか利用してもらえませんでした。

しかし最近、うれしいことに地場野菜が人気で、スーパーや一般のお店でも取り扱うところが出てきています。そういう意味では、皆さんに食べていただきやすくなったかなと思います。

もちろん、ここ幸町の販売所のような農家の共同販売所を利用していただく方法があります。共同販売所は、西砂や天王橋にもあります。どこも会員の農家が運営しているもので、販売日や販売時間はまちまちです。時間を確かめて

から利用してほしいですね。また、五日市街道沿いに多い農家の庭先販売所も、ご近所の方に好評です。こうした販売所を使って、新鮮な地場野菜をもっと食べてほしいですね。

立川農産物直売所(幸町)
開店時間 12時〜5時(土・日・祝日は休み)
端境期の2月下旬〜4月末まではお休み

Uさん
最初に体験した地震体験室で、震度3、震度5、震度7の揺れを体験。

地震3ではそれほど恐怖は感じませんでしたが、震度7では全く身動きできず、恐怖でした。食器棚がガタガタ揺れて、倒れてきたり…。

出入り口付近は物ぶさがない、テレビや食器棚などの家具は、転倒防止の措置をしておく、ガラスは飛散防止のフィルムを張っておくなど、日頃からの備えが大事です。安全な場所へ避難しようという時に、少しでもスムーズに行動できると思います。

煙体験室で、室内の明りが真っ暗になった時も動揺しました。

災害時は、電気が消えて暗くなることが多いので、日頃から非常用品、非常用持ち出し品を備えて、取り出しやすいところに置いておくことがポイントだと思います。

体験してみると、ふだんから災害時の避難場所や避難経路の把握、確認、災害が起きた場合について、家族で話し合っておくことが、いかに大切か改めて感じました。

※さがよく分りました。次に消火コーナー。スクリーンに映し出される炎に向って、消火器のピンをはずしホースを火の根元に付けてレバーを押します。正しく使えば水が噴射されるしくみです。天井まであがっていた火が消え、ほっとしました。

煙コーナーでは、煙が下から上に行く速度は一秒間に35mなのに対して、横に広がる速度は一秒間に1mくらいなので、ハンカチで煙を吸わないようにしながら、床から20センチぐらいのところに進むと良いなどの説明を受け、暗やみの中、壁つたいにドアを捜して進みました。やみの中はますますに歩けず、ドアが開いて明るくなった時は本当にほっとしました。

人工呼吸、心臓マッサージを練習

立川防災館
◆入場無料 ◆駐車場無料
◆交通 立川駅北口バス1番乗り場下車
◆開館 9時〜17時
◆休館 木曜日、第3金曜日(祝日の場合は直近の平日、年末年始)
◆電話 042(521)1119

アイム・いのち

地元でとれた物を地元で食べてこそ、自然を残して
住みよい町ができる。



原 剛さん
1938年生。早稲田大学大学院教授。毎日新聞客員編集委員。平成6年(1994年)より、立川市環境審議会会長。著書に『日本の農業』(岩波書店)『農から環境を考える』(集英社)『東京に農地があってなぜ悪い』(学陽書房)他。

●多忙な記者が「農」を始めたきっかけは？

30年程前、五日市街道沿いに入道雲のようにそそり立つケヤキ並木に魅せられて若葉町に家を建てました。当時、私は公害問題の取材で日本全国を飛び回る日々でした。そんな時、たまたま300平方メートルの畑を借りて農業の真似事から始めたのは、単なる偶然ではないかもしれません。

周りを見まわせば、見境なく環境破壊が進み、一方どんなものは豊かになっていく。そして身近な自然は消え、スーパーには季節に関係なく様々な野菜が並ぶようになったのに、本当にうまい野菜や安全な食べ物が手に入らなくなっていくことに危機感を覚えました。わたしは口から直接入る食べ物、生き方の基本だと考えています。安全でおいしい物を求めて考えていくと環境問題に行きつくわけですね。自らも農業と僅かながらに関わった事でその大切さを痛感しました。

●有機農法や地産地消を推されているそうですね

有機農法とは手間をかけ無駄を厭わない生き方そのもので、生命に優しく関わる、正に子どもを育てることと同じ

じだと思えます。昨今、教育現場が荒

れキレやすい子どもたちが問題になっていますが、自然を破壊し荒れるに任せてきた社会のありようと無縁ではありません。子どもたちの周囲に自然があり、土に触れる機会が増えることが教育にとっても大切なことだと思えます。地産地消には、消費者が地場の物を消費する事で生産者を支え、農地が確保される。そして人々が自然の豊かに癒されてそこに住み続けたいと思うようになるという意義があります。都会において、自然の最大のよりどころは農地に他ならないのです。

●消費者はどうかかわれますか

立川にはまだまだ豊かな農地が残っています。生産者がいてこそその農地、消費があつてこそ作る意欲につながるのです。立川の自然を守るためにぜひ地元の野菜をもっと広めてもらいたい、消費者が支えていくべきだと思います。それができなくて、農地が駐車場や宅地に変わっていくことは悲しいことです。身近な環境を守るためには、生活者である私たちが目先の安さや便利さに流されず、もっとしっかりしなくてはいけないでしょうね。

また、農家自身も農業の大切さや使命を十分に伝えているでしょうか。日本では、フランスを上回る数の女性が農業に従事しています。女性が頑張れる環境も必要でしょうね。

結局のところ、社会がもっと農業の大切さに気づき敬意を払っていくことが大切だと思います。

アイムインフォメーション

問合せ ☎042-528-6801

アイムは、男女共生社会の推進と、消費生活の向上をめざす市民活動の拠点です。

募集

■情報紙『アイム』市民編集委員2005

『アイム』は、女性総合センターの広報紙です。男女共生社会の実現や、消費生活の向上をめざした新しい生活文化を発信する情報紙の企画・編集に参加してみませんか。

発行は年3回。編集会議に参加する他、取材や原稿の執筆もしていただきます。

対象は、市内在住・在勤・在学者。保育・薄謝あり。募集は若干名。

申し込みは往復はがきに住所・氏名・年齢・電話番号・応募動機を書いて、4月22日(金)消印有効で、女性総合センターへ。

■「市民企画活動事業」実施グループ

女性を取り巻くさまざまな問題の解決や、男女共生社会の実現に向けた企画を、男女共生係とともに、講座やワークショップとして実施します。

対象は、5名以上の団体やグループで、企画・運営にかかわるメンバーの、半数以上が立川市民であることを条件とします。

申し込みは、4月28日(木)までに、所定の用紙で女性総合センター・男女共生係へ。

■アイムフォーラム実行委員

2005年度のアイムフォーラム(男女共生社会実現のための催しなど)の企画・運営を行う実行委員を募集します。

対象は、市内在住・在勤・在学者。会議は、原則として夜間に行います。

2004年度は、東京大学社会科学研究所助教授・玄田有史さんの講演と、新座はんさむウーマン・ネットワークによるパフォーマンスで、3月に実施しました。

申し込みは、はがきに住所・氏名・年齢・電話番号・応募動機を書いて、4月28日(木)消印有効で、女性総合センター・男女共生係まで。

■立川市消費者問題研究員

食の安全、安心や環境問題など、「身近な暮らし」をテーマに、一緒に考えてみませんか。

2004年度は「スローフード」をテーマに、実習や講習会などをおりまぜながら、研究会を14回開きました。

対象は、市内在住の20才以上の方。申し込みは、随時。問合せは、女性総合センター・消費生活センター係まで。

■「くらしフェスタ立川」参加グループ

アイム全館をステージに、「くらし」への問題提起や活動発表をしてみませんか。

企画・運営の全体が、消費生活センターの委託事業となります。

2004年度は「アイムで探そう あなたのくらし」をテーマに、8日間にわたり食・環境・男女共生・子育てなどを柱に、展示や講演会、

講習会、人形劇などを行いました。

募集するのは、会員が5名以上の市内で活動しているグループ。

申し込みは4月28日(木)までに、電話で消費生活センター係へ。

■講師派遣

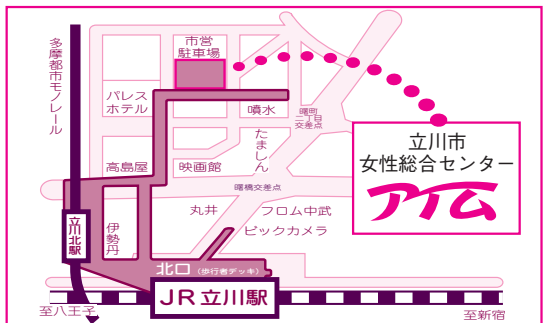
おおむね、会員が10人以上の団体やグループに講師を派遣します。講師派遣の費用は、原則として無料です。内容は次のとおり。

- ① 男女共生社会推進や、女性を取り巻く問題解決のための講座。
- ② 毎日のくらしの中での疑問や、生活に役立つ、消費者のための講座

お知らせ

■推進状況報告書ができました。

立川市第3次男女共生社会推進計画の、平成15年度の推進状況報告書ができました。アイム資料室で、閲覧できます。



編集後記.....

●新潟中越地震被災地に、雪解けの兆しは見えてきたでしょう。皆さまの大切な故郷に再び美しい春が訪れ、元のままの穏やかな生活が、一日も早く取り戻せることを祈ってやみません。

(小島 つね子)

●首都直下で大地震が起きたら、東京23区の大半は震度6強との予想。自分の防災力はどうなのか。立川防災館での体験学習に参加するなどして、防災評価のテストを受けてみたいと思っています。

(藪谷 英雄)

●間近といわれる、首都圏を襲う地震。備えあれば：なのに、必要に迫られないとどうも腰が上がりません。でも編集会議で、着々とアイデア豊かな防災対策を実践している話を聞いて、感心してしまいました。

(Y・T)

●デパートも映画館もあつて便利！だけではない立川を、農業と食の特集を作る中で発見。また環境を守る活動に生き生きと取り組む方々を知り、自然と人こそ、その土地の魅力、宝だと思いました。

(三浦 節子)

●マイブームは食育。生まれて始めて料理教室に通い、昔ブームの頃、少し使ったパン焼き器もフル稼働の日々。やっぱり食事のあり方は、生活そのものに関わっていると実感。家族も喜ぶいい雰囲気です。

(M・S)

「意見・感想をお寄せください。」